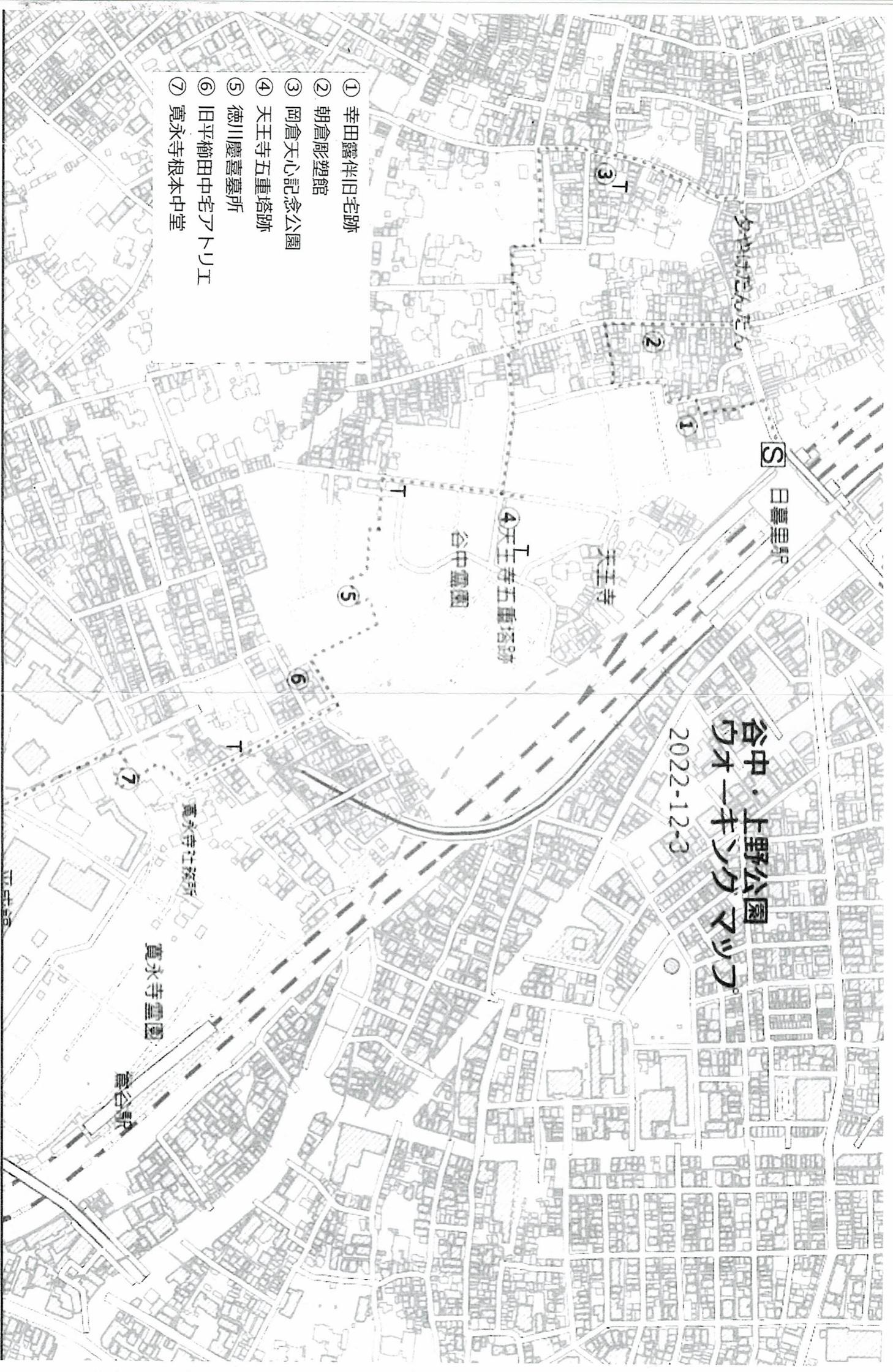


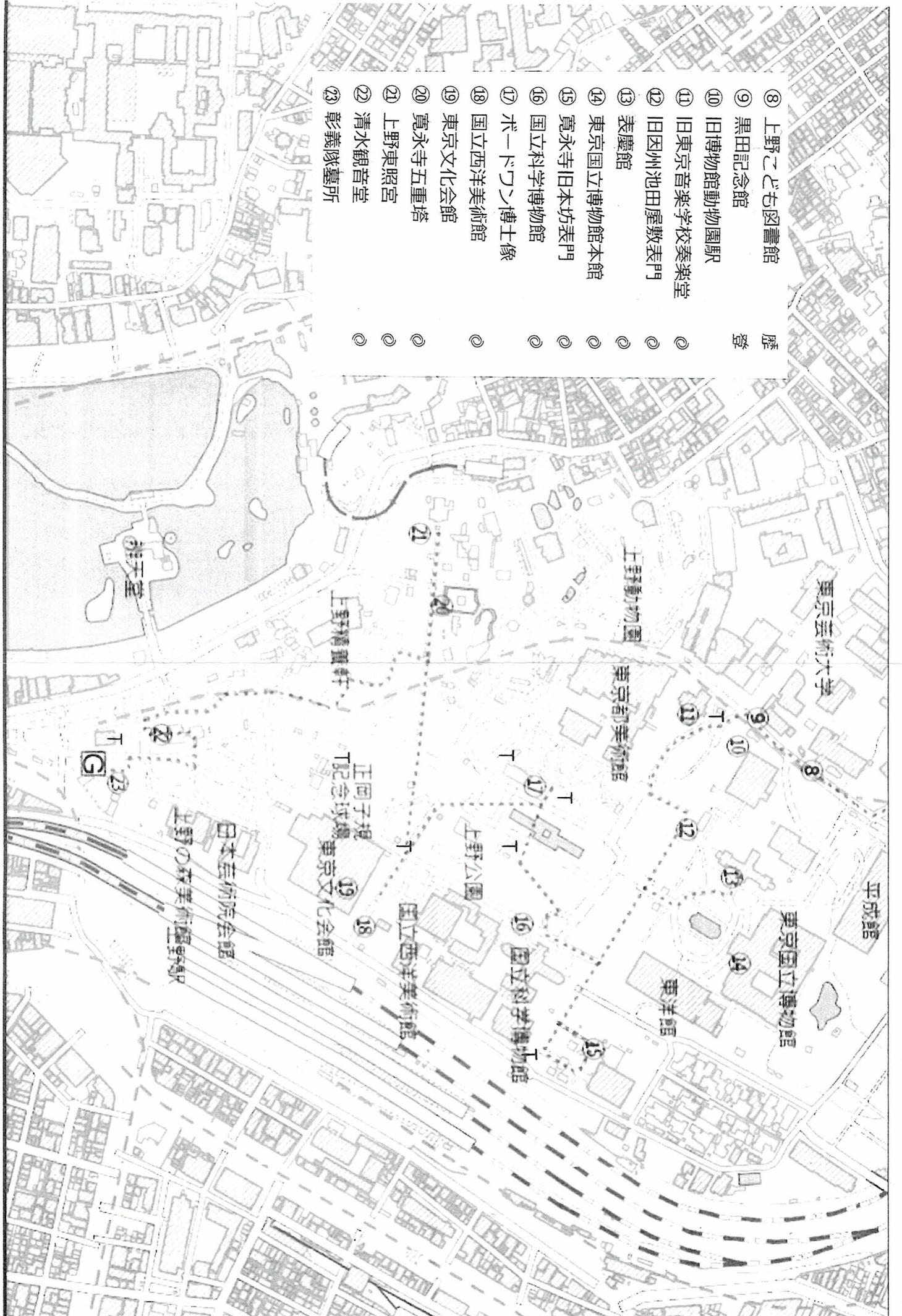
谷中・上野公園 ウォーキングマップ

2022-12-3

- ① 幸田露伴旧宅跡
- ② 朝倉彫塑館
- ③ 岡倉天心記念公園
- ④ 天王寺五重塔跡
- ⑤ 徳川慶喜墓所
- ⑥ 旧平柳田中宅アトリエ
- ⑦ 寛永寺根本中堂



- ⑧ 上野こども図書館 歴
- ⑨ 黒田記念館 登
- ⑩ 旧博物館動物園駅
- ⑪ 旧東京音楽学校演奏堂
- ⑫ 旧因州池田屋敷表門
- ⑬ 表慶館
- ⑭ 東京国立博物館本館
- ⑮ 寛永寺日本坊表門
- ⑯ 国立科学博物館
- ⑰ ボードウォン博士像
- ⑱ 国立西洋美術館
- ⑲ 東京文化会館
- ⑳ 寛永寺五重塔
- ㉑ 上野東照宮
- ㉒ 清水観音堂
- ㉓ 彰義隊墓所



- ① **幸田露伴旧宅跡** 1889年『風流佛』で文壇デビュー後、谷中『五重塔』(1892)などを発表し、作家としての地位を確立した。第1回文化勲章
- ② **朝倉彫塑館** 日本近代彫塑の基礎をつくった朝倉文夫の住居兼アトリエを公開した美術館で、建築は朝倉本人が自ら設計した。展示室は彫塑作品を展示する旧アトリエ部分を中心にして、遺品や蔵書、陶磁器など朝倉のコレクションを展示している。サンルームは「猫の間」とよばれ、朝倉の愛した猫をモチーフにした作品が一堂に会している。
- ③ **岡倉天心記念公園** 東京美術学校(現・東京藝術大学)の設立にかかわり、また日本美術院を創設した岡倉天心の旧居跡。五浦のものを模した六角堂があり、中には天心坐像が据えられている。公園のなかのいたるところに六角形が潜んでいる。
- ④ **天王寺五重塔跡** 谷中感應寺に寛永21年(1644)に建立された五重塔は明和9年(1771)に焼失した。その後、寛政3年(1791)に再建されたが昭和32年(1957)放火無理心中事件で焼失し、現在は史跡のみが残っています。幸田露伴の「五重塔」のモデル。
- ⑤ **徳川慶喜墓所** 円墳状の墓で、慶喜とその妻の墓が並んでいる。慶喜は華族の最高位である「公爵」を与えてくれた明治天皇に感謝の意を表すため、自分の葬儀を仏式でなく神式で行うよう遺言を残したため、一般皇族と同じような円墳が建てられました。
- ⑥ **旧平櫛田中宅アトリエ** 明治の彫刻家「鏡獅子」裸の菊五郎の塑像(石膏) アトリエには30年以上続けて制作できるだけの彫刻用の材木があった。死去時点では男性長寿日本一(107歳) 「不老 六七十ははなたれこぞう おとこざかりは百から百から わしもこれから」 「いまやらねばいつできる わしがやらねばたれがやる」 文
- ⑦ **東叡山寛永寺** 三代将軍徳川家光が川越喜多院の僧天海(108歳)の進言を受け1627年に建立された。往時には今の上野公園の大噴水の地に建っていたが、幕末の上野戦争で焼失。現在地に移転再建(1876~1879)、子院だった大慈院跡に、武蔵国川越の喜多院の本地堂を移築したもの。歴代の将軍6名が眠る。
- ⑧ **上野こども図書館** 1908年に帝国図書館として建てられ(設計 久留正道)、1929年増築、2002年に原形保存に努めながら全面改修(安藤忠雄) 児童書の専門図書館として同年全面開館した。都選定歴史的建造物
- ⑨ **黒田記念館** 黒田清輝の遺言により建設された美術館施設で、2階に展示室を設ける。外観はスクラッチタイル張り、正背面2階中央にイオニア式列柱6本を配してほぼ左右対称の端正な立面をつくる。1928年 設計は岡田信一郎。登録有形文化財
- ⑩ **旧博物館動物園駅** 京成電鉄の駅舎 付近の中高大学の最寄り駅として1933年に開業した。老朽化や乗降客数の減少により2004年に廃止された。外観は国会議事堂に似ているがこちらの方が早い。東京都選定歴史的建造物
- ⑪ **旧東京音楽学校奏楽堂** 東京音楽学校の校舎として1890年に建築され(山口半六 久留正道)、日本における音楽教育の中心的な役割を担ってきた。2階の音楽ホールは、かつて瀧廉太郎がピアノを弾き、山田耕筰が歌曲を歌い、三浦環が日本人による初のオペラ公演でデビューを飾った由緒ある舞台。1987年に現在地に移築・復原した。
- ⑫ **旧因州池田屋敷表門** 鳥取藩池田家上屋敷(現国際ビル付近) 1892年に芝高輪台町の東宮御所正門(高松宮邸) 1954現在地に移転 入母屋造、唐破風造両出番所付、総本瓦葺1棟
- ⑬ **表慶館** 皇太子(後の大正天皇)のご成婚を記念して市民からの寄付金によって奉獻された美術館である。(1908年片山東熊) 堅牢な煉瓦造で関東大震災の被害も少なく、倒壊したコンドル設計の初代本館の完成まで代行、ネオ・バロック様式 上層部外壁面の製図用具、工具、楽器などをモチーフにしたレリーフ 入口には2頭のライオン。
- ⑭ **東京国立博物館本館** 現在の本館は「日本趣味を基調とする東洋式」という様式規定で公募、渡辺仁による案が選ばれ、1938年に開館した。「帝冠様式」が特徴。150年にわたり受け継いできた収蔵品は現在約12万件。このうち国宝89件、重要文化財648件
- ⑮ **寛永寺旧本坊表門** 寛永寺の本坊(1625年)は、現在の東京国立博物館の地に建立されたが、上野戦争により焼失した。表門だけが残り帝室博物館(現東京国立博物館)の正門として使用されていたが、関東大震災後、博物館本館の建設の際に現在地に移築され、輪王殿の正門となった。門には攻撃による弾痕(だんこん)が数多く残る。
- ⑯ **国立科学博物館** 映写室付きの講堂や赤道儀室を備えた我が国最初の本格的な社会教育施設としての博物館建築として、高い歴史的価値がある(1931年 糟谷謙三) 本館は飛行機型の平面をもち、構造は、鉄筋コンクリート造を基本としている。
- ⑰ **ボードワン博士像** オランダ人 西洋医学の教師として来日、大学東校(東大医学部)、大阪医学校で教鞭に当たる。1870に荒れていた上野山内に東校附属病院の建設計画に対し、「大都会に公園を造って市民の憩いの場にすべきである」として上野山の公園化を主張、実現させた。公園の生みの親と言われている。
- ⑱ **国立西洋美術館** 西洋美術を展示する全般を展示する美術館としてはわが国で唯一。実業家松方幸次郎が20世紀初めにヨーロッパで収集した印象派などの19世紀から20世紀前半の絵画・彫刻を中心とする松方コレクションがコレクションの基礎となっている。1959開館(ル・コルビジユ 前川国男 坂倉順三 吉阪隆正) 世界遺産
- ⑲ **東京文化会館** 東京都開都500年祭の記念事業として開館(1961年)。東京の本格的なクラシック音楽のコンサートホールとしては初期のもので、クラシック音楽の殿堂オペラの聖地として名高い。建築家 前川国男の代表作の一つで日本建築学会賞他の受賞多い。
- ⑳ **寛永寺五重塔** 老中土井利勝により寄進されたもの。1621年の物が1626年消失したので同年再建された。日光東照宮造営に当たった大工に作らせたもので、江戸時代は東照宮、明治になり寛永寺に移った。現在は東京都。
- ㉑ **上野東照宮** 徳川家康を祀った社で、当初は浅草寺境内に造られたが火災で消失。現在地(藤堂高虎屋敷)にあった東照宮に大名諸侯が参詣するようになり、3代家光が社殿の作り替えを行った(1651) 参道の両側の50基の青銅灯籠と195基の石灯籠は御三家、諸大名による奉納である。社殿は当時の物で日光と同様の権現造りである。
- ㉒ **清水観音堂** 1631年 天海が京都清水寺を模して建立した。舞台から不忍池(琵琶湖)、弁天島(竹生島)が望まれる。関東大震災や戦災を逃れ、現存する寛永寺建造物では一番古い。
- ㉓ **彰義隊墓所** 幕末、薩摩、長州を中心にした新政府に不満を持つ士族らで結成された彰義隊は、1868年大村益次郎が指揮する薩摩、長州を中心とした新政府軍と、上野寛永寺寺領域を舞台に、戦争を勃発させます。しかし半日で破れ、彰義隊隊士の死者は266名にのぼり、円通寺の住職と、寛永寺の御用商人の三河屋幸三郎らが彼らを集めて火葬し、円通寺に埋葬されました。その火葬した場所が彰義隊墓所。

<まち歩き(谷中・上野界限)>

追加資料と説明

スタート時点の日暮里駅前で、最初に王子から上野まで京浜東北線に沿って続く切り立った崖を説明しました。

当初はこれほど切り立った崖ではなく、急坂程度だったのですが、鉄道(山手線)を施設するにあたって斜面を削って崖にして線路スペースを確保しました。日暮里駅の上野寄りに線路をまたぐ「芋坂こ線橋」がかかっています。鉄道が敷かれる前には「芋坂」という急坂があり、そこにあった団子屋が現在の「芋坂 羽二重団子」です。

崖を見ながらの説明に使用した東京の高低差(崖、坂、河川、窪地)がレリーフ調に表現された図を、何人かから求められましたので添付します。

国土地理院の公開データを加工したもので、南北は黒目川(6年前に美濃さん案内)から多摩川河口まで、西は善福寺公園の範囲をパソコンの能力上6分割して、それをつなぎ合わせたものです。

黒目川、石神井川、神田川等の河川の窪みが分かります。上野から新宿までの山手線は線路のように見えますが、線路わきの壁(高さ5mくらい)が黒く表示されているものです。また青山から六本木、麻布、品川にかけての台地の出入りが良く分かるかと思います。

崖については、永井荷風が

「日和下駄 一名東京散策記」 第九 崖

の中で次のよう「日暮里の坂は最も偉大」と書いています。

昔から市内の崖には別にこれという名前のついた処は一つもなかったようである。『紫の一本』その他の書にも、窪、谷なぞいう分類はあるが崖という一章は設けられていない。しかし高低の甚しい東京の地勢から考えて、崖は昔も今も変りなく市中の諸処に聳《そび》えていたに相違ない。

上野から道灌山《どうかんやま》飛鳥山《あすかやま》へかけての高地の側面は崖の中《うち》で最も偉大なものであろう。神田川を限るお茶の水の絶壁は元より小赤壁《しょうせきへき》の名がある位で、崖の最も絵画的なる実例とすべきものである。

